

広島県総合グラウンドの歩み

広島県総合グラウンドは、1941年(昭和16年)に「広島県総合体錬場」として誕生しました。当時は西日本最大規模のグラウンドと言われ、県民からは「県営総合競技場」と呼ばれていました。

この工事には、広島市内の旧制中学、旧制女学校(現在の中学生)の勤労奉仕動員学徒が延べ18万人動員されました。生徒たちがモッコをかついで土や石を運び、平坦にならして総合体錬場は完成しました。そして、同年12月7日には完工式が盛大に行われ、3日間にわたって記念の体育大会が開かれました。

しかし、翌日12月8日に日本は太平洋戦争に突入。体育大会は予定通り開催されましたが、戦争が始まった重い空気の中での開催となりました。翌年の1942年(昭和17年)には中等野球大会や三県対抗陸上大会などが開かれましたが、戦争が続くなか、この総合グラウンドも活用されることが無くなり、資材置き場になったり、芋畑として掘り起こされたりしました。

戦争が終わり、復興のシンボルとして誕生した「広島カープ」は、ここ広島県総合グラウンド野球場を本拠地として、1950年(昭和25年)から7年間、熱狂的なファンの声援を受けながら熱戦を繰り広げました。球団存続に必要な資金集めに球場で行った樽募金は今も語り草として受け継がれています。

さらに、1951年(昭和26年)の第6回広島国体では、メイン会場として全国に広く知れ渡ることになりました。この年にはラグビー場も完成しています。1967年(昭和42年)には、第1回織田幹雄記念陸上競技大会が開催され、その後、陸上競技だけでなく、サッカー、ラグビーなどの国際大会の会場としても使用されることが多くなりました。1968年(昭和43年)には、インターハイのメイン会場となり、全国から多くの高校生が集い、陸上競技場では連日すばらしい競技が繰り広げられました。

1994年(平成6年)のアジア競技大会では、サッカーと野球、2年後のひろしま国体では、成年男子ラグビーの会場となったほか、天皇杯全日本軟式野球大会、全国スポーツ・レクリエーション祭の会場となるなど、これまで数多くの全国規模の大会が開催されています。最近ではラグビーリーグワンの会場としても、多くのファンに御来場いただいています。